

研究主題

「文章に対する感想や意見を伝え合い、

自分の文章のよいところを見付けることができる児童の育成

—一人1台の学習者用端末を活用した書く授業モデルを通して—

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課

目黒区立東根小学校 主任教諭 小松 史

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）では、国語の目標について、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を（中略）育成することを目指す。」と示されている。そして、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（令和3年1月）では、「言語能力や情報活用能力、デジタル時代における情報への対応（中略）などの課題がある。」と述べられている。

また、令和4年度全国学力・学習状況調査調査結果資料【都道府県別】（令和4年7月28日公表）によると、「文章全体の構成や展開が明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。」に関する問題の東京都の正答率は39.0%であり、全ての問題の中で、最も正答率が低かった。また、「学校で、学級の友達と意見を交換する場面で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っていますか」という質問に対して、週1回以上使用していると回答した児童は56.2%であった。

そこで、本研究では、「一人1台の学習者用端末を活用して観点を明確にしなが、互いの文章を読み合うとともに、よいところを伝え合う学習活動」を指導過程に位置付けることで、児童は書こうとしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けることができる児童を育成することをねらいとする。児童は、自分の文章のよいところを見付けることで、今後の自分の表現に生かすことができると考える。

第2 研究仮説

小学校中学年国語科の書くことの学習において、「一人1台の学習者用端末を活用して、観点を明確にしなが、互いの文章を読み合うとともに、よいところを伝え合う学習活動」を指導過程に位置付けることで、児童は書こうとしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けることができるようになるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

小学校学習指導要領解説国語編（平成29年7月）では、「書き手が書こうとしたことが明確に表現されているところを見付けることなどが重要である。（中略）自分の文章のよいところを見付ける際には、記述した内容以外にも、相手について配慮したこと（中略）などを共有することも大切である。」と示されている。そこで、本研究では、文章のよいところの観点を「書こうとしたことが明確になっているか」「文章に対して相手や目的を意識した表現になっているか」とした。また、一人1台の学習者用端末に関する先行研究や活用事例等を収集し、分析した。

2 調査研究

令和5年7月に都内公立小学校1校の第4学年に在籍する児童 117人と都内公立小学校 22

校の学級担任の経験のある教員 166 人を対象に、書くことにおける指導事項についての意識調査と、一人1台の学習者用端末の活用状況についての調査を行った。

その結果、「自分の文章のよいところを見付けること」の項目において、児童の肯定的な回答は 56%であった。また、同項目の教員の肯定的な回答は 74%であった。双方とも他項目に比べ、最も低い数値であった(表 1)。

一方、一人1台の学習者用端末の活用では、「情報を整理する場面 (21%)」「授業を振り返る場面 (37%)」「感想や意見を伝え合う場面 (39%)」の順で低い数値であった。

このことから、①書くことの学習において、自分の文章のよいところを見付けるための手だてを講じる必要があること、②一人1台の学習者用端末の効果的な活用法を指導過程に位置付ける必要があること等が分かった。

表 1 指導事項についての意識調査

項目	所属校第 4 学年児童		所属地区教員	
	肯定 (%)	否定 (%)	肯定 (%)	否定 (%)
自分の文章のよいところを見付けること	56	44	74	26
感想や意見を伝え合うこと	78	22	95	5
文や文章を整えること	86	14	96	4
書き表し方を工夫すること	71	29	93	7
文章の構成を考えること	73	27	96	4
伝えたいことを明確にすること	94	6	99	1
相手や目的を明確にすること	90	10	95	5

3 開発研究

(1) 一人1台の学習者用端末を活用した書く授業モデル

児童が、「観点を明確にしながら自分の文章のよいところを見付ける」ことができるように、「デジタルを活用したこれからの学びの提案」(東京都教育庁総務部教育政策課 令和 5 年 4 月 3 日)に示された「学びのプロセスについて」を基に、一人1台の学習者用端末を活用した書く授業モデルを開発した(図 1)。この授業モデルは、以下のプロセスで学習を進める。

まず、「学習課題の設定」では、教師が単元を通じた学習課題を設定する。次に、「見通しの設定」では、児童が各自で学習課題に対する学習計画を立てる。また、「学びの活動」では、「題材の設定、情報の収集、内容の検討」等の各学習過程において、児童自身が進捗状況を確認しながら学習を進めていく。最後に、「学びの振り返り」では、児童自身が学習の内容及び学習方法の振り返りや共有し、次の学習へどのように生かしていくか考える。

こうしたことを通じて、児童が学習に対して、更に深めようと判断した場合、必要な学習過程に戻るなど、自己調整しながら学習を進めていくことができるようになる。

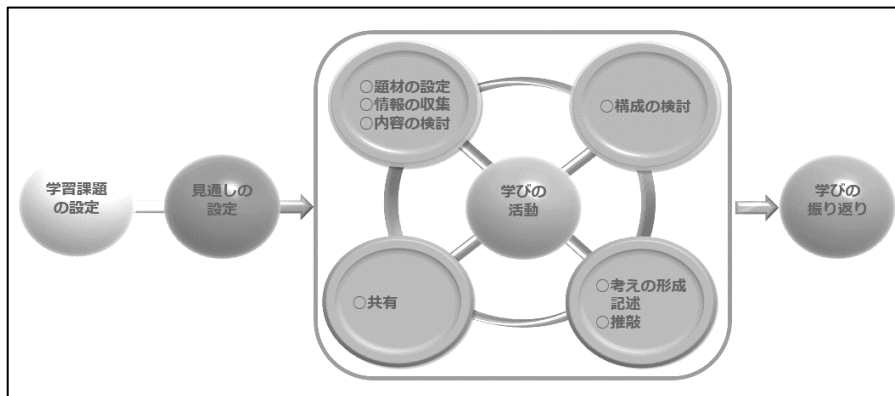


図 1 一人1台の学習者用端末を活用した書く授業モデル

(2) デジタル付箋機能・共同編集機能を活用した学習活動

デジタル付箋機能と共同編集機能を活用した学習活動を開発した。これらの機能を活用することで、児童は、学習の状況を蓄積し、学習の修正を行うことや見通しをもって学習を進めることができる。また、文章のよいところを伝え合う際にも共有しやすくなる。同時に、教員は、児童の学習状況を確認することができる。各機能の具体的な活用方法は、以下のとおりである。

【デジタル付箋機能の活用】

ア 調べた情報をデジタル付箋に書き出した後、デジタル付箋を「テーマに合うか」「自分の考えを支える理由、事例であるか」で分類する。

イ 互いに助言し合う学習活動を設定する。手書きとデジタル付箋機能を活用し、観点（読み合いのポイント）を明確にし、助言する（図2）。

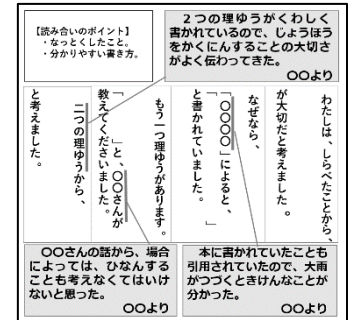


図2 助言し合う学習活動

ウ 互いの文章のよいところを見つけた後、各児童が自分の文章のよいところを見付ける学習活動を行う。他の児童からの意見や感想を基に、自分の文章のよいところを自分の言葉で書く時間を設定する。

【共同編集機能の活用】

エ 全学習過程で取り組んだ学習データを蓄積し、他の児童の学習を知り、互いの文章を参考にしながら書く。

4 検証授業の概要（令和5年9月～10月実施）

都内公立小学校にて第4学年（122人）を対象に、国語科「もしものときにそなえよう」（全12時間扱い）で検証授業を実施し、災害への備えについて、第2学年の児童に伝える文章を書く活動を行った（表2）。

表2 単元指導計画（12時間）

授業モデル	学習過程	時	学習活動	機能活用	
				デジタル付箋	共同編集
学習課題の設定 見通しの設定	一次	1	○自然災害への備えについて、学習の見通しをもつ。		エ
学びの活動	二次	2・3	○相手や目的を意識して、テーマを選び、複数の方法で調べる。 ○調べた内容を分類・整理し、伝えたいことを明確にする。	ア	
		4	○「初め」「中」「終わり」の役割を理解し、「中」に書く内容を考える。		
		5・6	○自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にし、書き表し方を工夫しながら、下書きを書く。		
		7・8・9	○自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にし、書き表し方を工夫しながら、清書をする。	イ	
学びの活動 学びの振り返り	共有	三次 10・11・12	○書こうとしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける。	ウ	▼

5 検証授業の分析

(1) 児童の文章の変容

検証授業終了後、児童Aに着目し、文章の変容を分析した（表3）。

児童Aは、竜巻の備え方について調べた際、第5・6時の「考えの形成・記述」では、『竜巻だとわかる現象は、雲から下に伸びる「ろうと雲」が見える。』と記述した。

しかし、第8・9時の「推敲」で他の児童から、『漢字が多い。また、「ろうと雲」という言

葉は、2年生には難しいため、具体的に書いた方がよい。」とアドバイスをもらったことで、「雲から下にのびるろうと雲（細長いうずのような、はしらの雲）が見える。」と2年生が読める漢字のみを使用し、相手を意識して、書こうとしたことを明確にして書くことができた。

また、第11時の「共有」では、これまでの学習を生かして、文章の冒頭に問いを付け加え、相手を意識した表現で書き方の工夫をしていた。

こうしたことを通じて、第12時では「書き出しに問いかけをいれたところ。」「友達のよいところを参考にし、具体的に説明したところ。」等、自分の文章のよいところについて見付けることができた。

表3 児童の文章の変容

第5・6時 記述後	第8時 アドバイス等	第9時 推敲後	第11時 共有後
【児童Aの文章】 『竜巻だとわかる現象は、雲から下に伸びる「ろうと雲」が見える。』	・漢字が多い。 ・「ろうと雲」はどのような雲か具体的に示した方がよい。	『たつまきだとわかるげんしょうは、雲から下にのびる「ろうと雲」（細長いうずのような、はしらの雲）が見える。』	【冒頭文に付け加えた問い】 「あなたは、たつまきがおこった時、そのような行動をとるといいと思いますか。」

第12時 自分の文章のよいところ
・書き出しに問いかけをいれたところ。(友達のよいところを参考にした。) ・ろうと雲の後ろに()をつけて、解説したところ。(友達のよいところを参考にした。) ・分かりやすくするために、理由をくわしく書いたところ。

(2) 児童質問用紙調査について

検証授業実施前後における児童質問紙調査の結果を分析した。「自分の文章のよいところを見付けること」の項目において、肯定的な回答が56%から72%となり、16ポイント増加した(図3)。また、実際に、「段落を分けて分かりやすくした。読み手に伝わりやすいように文章の長さに気を付けたところ。」等、自分の文章のよいところを具体的に記述していた。

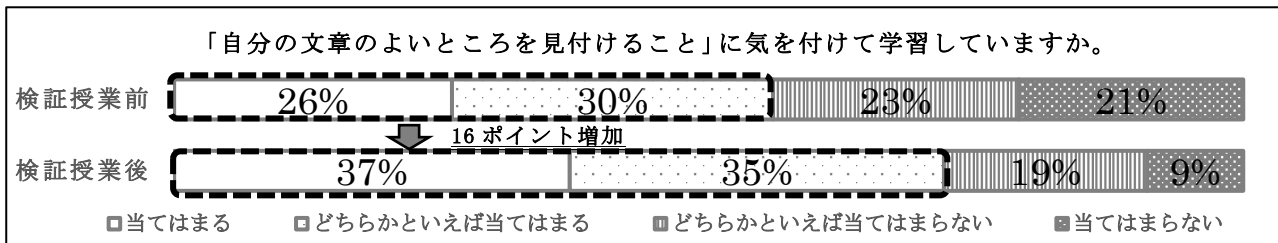


図3 検証授業前後の児童対象質問紙の調査結果

また、同項目について、授業前の平均値(M=2.55)と授業後の平均値(M=3.11)との間に有意な差があるかを検証するため、対応のあるt検定を実施した(両側検定)。その結果、有意な差が認められ、授業前より授業後の平均値が高まった(t(98)=4.49, r=0.236, p<0.01)。

以上の検証から、授業前の平均値よりも、授業後の平均値が高いことが明らかになり、指導法に一定の効果があると考えられることが分かった。

第4 研究の成果

- ・「一人1台の学習者用端末を活用して、観点を明確にしなが、互いの文章を読み合うとともに、よいところを伝え合う学習活動」は、書こうとしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けることができるようになるための手だてとして一定の効果があった。

第5 今後の課題

- ・本研究での手だての有効性を他の単元で検証し、汎用性を高める。
- ・自分の文章のよいところを具体的に書けているにも関わらず、気付いていない児童がいた。児童に自己の成長を気付かせるための手だてを開発する。